

「異界」のイメージを分析する

佐藤 手織*

Analyzing Image of Another World

Taori SATO

Abstract

The purpose of this paper was to examine what factorial components our image of another world consists of. The results of factorial analysis showed five factors-callousness, pleasantness, attractiveness, wonderfulness, and perceptually unsegregatedness.

Furthermore, the hypothesis was tested whether these last two factors reflect our implicit (indirect) perception theory. It became clear that introversive subjects regarded another world as wonderful and perceptually unsegregated more than extroversive ones, which was supportive of our hypothesis. However, further research will be required to clarify these points in detail.

Key words: image of another world, factorial analysis, implicit (indirect) perception theory, introversive/extroversive

1. はじめに

本論文の目的は、「異界」とは何か？という素朴な問題を探索的に考察することである。この問題は、素朴であるがゆえに、改めて我々に常識の再考を促すような扱いにくさがあるように思われる。第一に、語用上の定義が必ずしも明確ではない点が挙げられる。『広辞苑第五版』(岩波書店)や『国語大辞典』(小学館)において、「他界」「異人」といった関連語の所載はあるものの、「異界」の項目は採用されていない。一方、『大辞林第二版』(三省堂)では、「疎遠で不気味な世界のこと。亡霊や鬼が生きる世界」を意味する「人類学や民俗学での用語」として記載されている。最近では、青年論を扱う社会学(門脇, 1992; 門脇・宮台, 1995)や問題行動・心理療法を扱う臨床心理学(岩宮, 1996; 田中, 1995)等の分野でも、キーワードとしての「異界」の使用が散見されるようになったが、学術用語としての語用についてはこれ以上ここでは

取り扱わない。本論文ではあくまで、より一般的な語用を問題とする。次節の調査からも明らかになることだが、「異界」の名称が適用可能な範囲は幅広い。上述の「亡霊や鬼が生きる世界」に留まらず、「宇宙」「深層心理」「フィクション」といった一般にイメージされやすいものから、昨今の一種のブームの中で写真集のテーマとして扱われるようになった「廃線跡」「廃墟」等まで¹⁾、内藤(1998)が「異界」といって、魑魅魍魎が跳梁跋扈するおどろおどろしい世界を思い浮かべがちだが、私が求める異界とはそんな神秘主義的なものではない」と指摘するように、はるかに広範な含意を「異界」という言葉に認めることができる。この点が、「異界」の定義の困難さを示す1つの典型的な事実と思われるが、ここでは、内藤(1998)の、上記の引用に続く定義—「(異界とは)人間が想像力で生み出した非日常的な世界(をいう)」—に従ってみたい。「想像力で生み出した」の記述を「想像力が介入する余地が大きい」と拡大解釈するならば、「宇宙」や「外国」等までもカバーできる、包括性の高い定義と思われる。

平成 15 年 12 月 19 日受理

* 総合教育センター・助教授

困難の第二点は、上記のように「異界」を「非日常的な世界」と定義した場合、その前提として明らかになっているべきはずの「日常」「現実」「リアリティ」と呼ばれるものの意味が必ずしも自明ではない、ということである。たとえば、『広辞苑第五版』によれば、「現実」は「現に事実としてあること」、「リアリティ（実在）」は「実際に（客観的に）存在すること」と定義されているが、我々の体験する「現実」が結局は認識によることを認めるならば、Koffka の「なぜ事物は、そう見えているように見えるのか？」という問立てからも示唆されるように、「現実」の絶対性・真正性（veridicality）・自明性を我々は無条件に受け入れている訳ではない。ここに、「異界とは何か？」との問立てに関して認識論・存在論による議論が有効である可能性が示唆されるが、いずれにせよ、この問立てを通じて、結局は「現実」「日常」の意味を明らかにする、とも、本論の目的は再定義できる。本研究では、まず予備調査として、「異界」の具体例およびその性質を表現する形容語の収集を行い、次に本調査として、その結果を踏まえて作成された質問

紙による「異界」のイメージの因子分析を実施する。さらに、「異界」のイメージを認識論・存在論と関連づけるための（この際、解釈に有効となるであろう哲学的議論について、筆者は知悉するものではないが）若干の補足的考察を試みる。

2. 調 査

2.1 予 備 調 査

117名の理系大学生・専門学校生（大学生は工科系、専門学校生は看護系。男子71名、女子46名）を対象に、「『異界』として具体的に思いつくものを3つ挙げ、さらにそれぞれの『異界』について、その性質をよく表現すると思われる形容語を3つずつ挙げなさい」と質問する調査を行った。その結果を図1（具体的な「異界」）・2（「異界」イメージの形容語）に示す。それぞれ、報告数が10以上ある回答を挙げているが、報告数が10未満でも意味が類似した回答は可能な限り一括して集計し、その結果報告数が10以上になれば適切な共通カテゴリー名で図示するこ

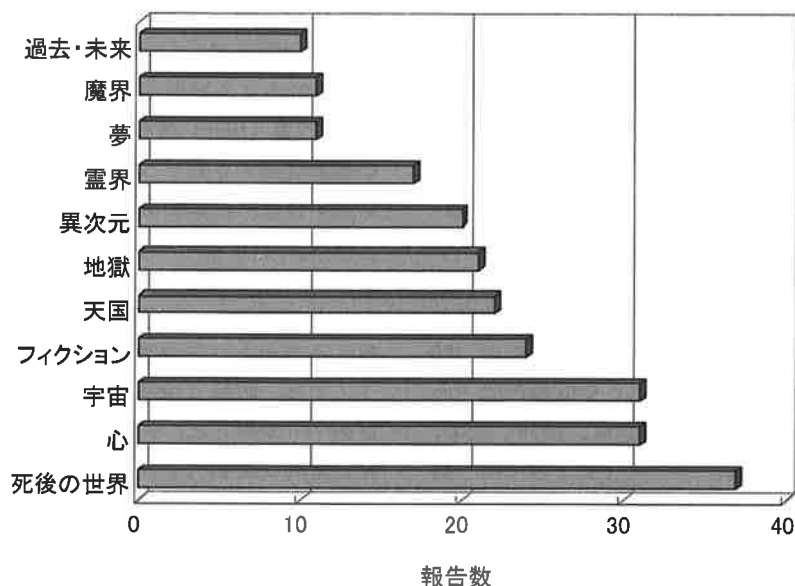


図1 具体的な「異界」の報告数

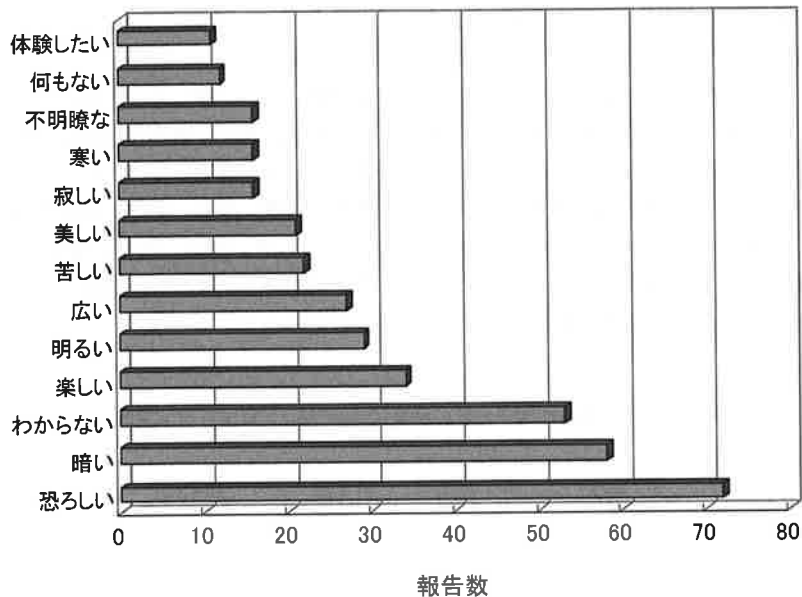


図2 「異界」イメージを表す形容語の報告数

とした。

まず，具体的な「異界」として最も報告数が多かったのが「死後の世界」（回答者 37 名，以下数字のみ）で，以下「心」（31）「宇宙」（31）「フィクション」（24）と続いた。「天国」「地獄」等の回答を「死後の世界」のカテゴリーとして一括することも考えられたが，それら自体の報告数が多く（22，21），また，そのイメージも対照的であるため，別個のカテゴリーとして集計した。逆に，「心」のカテゴリーは，「他人・他の動物の意識世界」「自分の深層心理」等さまざまな回答を一括したものである。同様に，「宇宙」のカテゴリーには「ブラックホール」，「フィクション」のカテゴリーには「神話」「伝説」「小説」「漫画」「テレビドラマ」など，さまざまな内容が含まれている。

「異界」を表現する形容語としては，「怖い」（72），「暗い」（58），「わからない」（53），「楽しい」（34），「明るい」（29），「広い」（27）が回答数の上位を占めた。「怖い」「わからない」の集計では，それぞれ意味の類似性が高いと思われる形容語（前者では「こわい」「おっかない」，

後者では「不思議」「あり得ない」「未知」等）多数を一括している一方，「暗い」については表現の多様性はほとんどなかった。「体験したい」（11）「漠然とした」（16）のカテゴリーは，それぞれ，「知りたい」「行きたい」「見てみたい」，「不明瞭」「形がない」「もやもや」等の回答を一括したものである。

2.2 本 調 査

本調査の目的は，「異界」を形容語で評定した結果に対し因子分析を実施し，「異界」のイメージを構成する因子を抽出・解釈することである。予備調査の結果を参考に，被験者に実際にイメージしてもらう「異界」およびそれを表現する形容語（評定項目）を選定し，質問紙を作成した。

方 法

被験者として理系大学生・専門学校生 110 名（大学生は工科系，専門学校生は看護系。男性 35 名，女性 75 名）が本調査に参加した。

質問紙で被験者にイメージさせる「異界」は、予備調査で回答数が3以上のものを採用することを原則とした。ただし、予備調査では一括された複数のカテゴリーは、回答数が5以上の場合に別個に採用することとした。たとえば、予備調査では一括した「宇宙」「心」のカテゴリーは、それぞれ「宇宙」「ブラックホール」、「他人(の心)」「深層心理」と、個別の項目として設定された。「フィクション」「超常現象」には、そ

の内容としてそれぞれ「小説、ドラマ、神話」「ポルターガイスト」を例示し、また「超能力・超常現象」は、一括して1つのカテゴリーとした。その結果、20の「異界」(死後の世界、深層心理、他人(の心)、宇宙、フィクション、天国、地獄、異次元、夢、過去、未来、超能力・超常現象、無、パラレルワールド、霊界、魔界、ファンタジー、ブラックホール、外国、闇)が、評定対象として設定された。

表1 異界イメージの確認的因子分析の結果(主因子法、プロマックス回転後の因子パターン)

項目(形容語)	第1因子 非情	第2因子 快適さ	第3因子 魅力	第4因子 理解不可能	第5因子 知覚的未分化
苦しい	0.85	-0.01	0.02	-0.04	-0.02
寂しい	0.79	0.05	0.05	-0.06	0.17
暗い	0.70	-0.22	0.08	0.00	0.09
寒い	0.70	0.07	0.05	0.00	0.08
恐ろしい	0.68	-0.14	-0.01	0.15	-0.13
汚い	0.67	0.12	-0.07	-0.08	-0.16
嫌な	0.57	-0.02	-0.25	-0.04	-0.06
明るい	-0.15	0.74	-0.06	-0.01	-0.06
美しい	0.09	0.73	0.11	0.08	0.06
楽しい	-0.05	0.70	0.12	-0.01	-0.10
やさしい	-0.00	0.69	-0.09	0.01	0.05
行きたくない	0.12	0.02	-0.82	0.14	-0.05
行きたい	0.02	0.13	0.81	-0.07	0.03
興味ある	0.04	-0.09	0.73	0.19	-0.06
不思議な	-0.15	-0.14	0.05	0.72	0.05
すごい	0.10	0.09	0.16	0.52	-0.24
広い	0.19	0.26	-0.03	0.44	0.19
遠い	0.12	0.24	-0.07	0.34	0.10
わからない	-0.13	-0.11	-0.20	0.33	0.10
何もない	0.04	0.02	-0.03	-0.01	0.74
漠然とした	-0.07	-0.01	0.03	0.14	0.68
固有値	6.27	2.88	1.86	1.21	1.07
因子間相関					
因子1					
因子2	-0.440				
因子3	-0.423	0.636			
因子4	0.152	0.229	0.250		
因子5	0.309	-0.287	-0.319	0.237	

表2 異界の因子得点

異界	第1因子 非情	第2因子 快適さ	第3因子 魅力	第4因子 理解不可能	第5因子 知覚的未分化
パラレルワールド	-0.53	0.40	0.44	0.16	-0.39
ファンタジー	-1.12	1.28	0.69	0.23	-0.46
フィクション	-0.26	0.51	0.44	-0.35	-0.65
ブラックホール	0.79	-0.94	-0.70	0.44	0.73
闇	0.91	-1.02	-1.01	-0.46	0.81
異次元	-0.15	-0.03	0.12	0.35	0.30
宇宙	0.26	0.39	0.87	0.93	0.27
過去	-0.19	0.22	0.12	-1.01	-0.69
外国	-0.20	0.86	0.78	-0.16	-0.97
死後の世界	0.08	0.05	-0.33	0.28	0.52
深層心理	-0.12	-0.35	0.15	-0.14	0.07
他人の心	-0.04	0.17	0.22	-0.15	-0.32
地獄	1.37	-1.13	-1.24	-0.18	0.08
超常現象	0.06	-0.72	-0.15	-0.01	-0.28
天国	-1.09	1.19	0.40	0.36	0.08
魔界	0.73	-0.78	-0.84	0.04	0.10
未来	-0.48	0.51	0.61	-0.28	-0.52
夢	-0.19	0.41	0.49	0.08	-0.18
無	-0.19	-0.66	-0.53	-0.25	1.08
霊界	0.35	-0.34	-0.52	0.12	0.40

評定形容語についても、「異界」とほぼ同様の基準で予備調査結果からの選別を行い、25の形容語を採用した（予備調査では一括された「わからない」のカテゴリーは、「わからない」「不思議な」の別個のカテゴリーとして設定した）。また、「異界」への接近可能性の評定語「行きやすい」も、独自の尺度として項目に加えた。アンケートでは1頁に1つの「異界」と26の形容語が記載され、被験者はそれぞれの「異界」を形容語により5件法で評定することを求められた（1点「あてはまらない」～5点「あてはまる」）。「異界」および形容語の提示順序はランダム化されている。アンケートの配布は講義時間を利用して行われたが、回答にはかなりの時間を要するため回収は後日とした。

結 果

評定の結果得られた形容語 26×「異界」20×被験者 110 のデータを形容語 26×「異界」*被験者 2200 のデータに縮約し、主因子法・プロマックス回転による探索的な因子分析を行った。固有値 1 以上を基準として因子の抽出を試みたところ、6 因子の解が得られた。さらに、①負荷量が 0.4 以上となる因子が 1 つもない ②複数の因子に対して 0.35 以上の負荷量を有する、ことを基準として不良 5 項目（「狭い」「暑い」「あり得ない」「素晴らしい」「行きやすい」）を削除し確認的な因子分析を行った結果、表 1 に示すような 5 因子解を得た。また各「異界」の因子得点を表 2 に示す。

第 1 因子は「苦しい」「寂しい」「暗い」「寒い」の負荷量が大きく、「地獄」「闇」「ブラックホール」「魔界」の因子得点が高い。あたたかみや人

間味が感じられないとのイメージで「非情」の因子とした。第2因子は「明るい」「美しい」「楽しい」「やさしい」の負荷量が大きく、「ファンタジー」「天国」「外国」の因子得点が高い。第1因子との負の相関が高く、対照的な意味合いを持つと考えられることから「快適さ」因子と命名した。第3因子は、第1因子と負の相関・第2因子と正の相関が高い。「行きたい」「興味がある」の負荷量が大きく、「宇宙」「外国」「ファンタジー」の因子得点が高い。「興味をそそる」「引力を持つ」の意味がある英語 attractive に近いニュアンスが認められ「魅力」因子とした。第4因子は、「不思議な」「すごい」の因子負荷量が特に大きいため、英語 wonderful (「素晴らしい」)の他に「不思議な」「驚異的な」の意)のニュアンスを持つと考えられた。また、「宇宙」「ブラックホール」の因子得点が高く、「広い」「遠い」等の負荷量が大きいことも考慮し、常識やイメージが通用しない性質としての「理解不可能」の因子と命名した。第5因子は「何もない」「漠然とした」の負荷量が大きく、「無」「闇」「ブラックホール」の因子得点が高い。知覚的な分化が達成されていない状況を示すと考えられたため「知覚的未分化」の因子と命名した。各因子の内部一貫性についてクロンバックの α 係数を算出したところ、第1因子で0.88・第2因子で0.83・第3因子で0.75・第4因子で0.59・第5因子で0.70と、第4因子で若干数値が低かったが概ね高い内的整合性を示したと言える。

第1因子と第2・3因子とは負の相関が高く、対照的な意味合いを有する。「異界」の印象として、苦—楽・快—不快のどちらか一方に極端に偏ったイメージが強いことがうかがわれ興味深い。これらの因子は、「日常」「現実」の世界を苦楽が混在・交替して現れる世界と見なす認識を反映していると考えられる。一方、第4・5因子は、われわれの暗黙の知覚(認識)観を反映したものではないかと考えられる。すなわち、われわれは、「現実」世界が「分化」「理解(意味

づけ)」のプロセスを経て認識されるとする知覚観(メタ認知)を無意識裡に有し、これらの因子が示す「異界」のイメージはその反映と仮定されるのである。この点については、次節で詳述・検討することとする。

3 補足的考察

近年我が国で、アメリカの心理学者ジェームズ・ギブソンのユニークな思想である直接知覚論が、その独特な用語—アフォーダンス・不変項等—とともに詳しく紹介されてきた(Gibson, 1979/1985; 佐々木, 1994; 佐々木・村田, 1994; 境・曾我・小松, 2002; 河野, 2003等)のに伴い、彼が旧来の知覚理論を批判して名づけた「間接知覚論(間接的認識論)」の名称も広く知られるようになってきた。

ギブソンの思想はあらゆるかたちでの間接的な認識論を批判するというところに出発点があります。(中略)間接的認識論とでもよべる考え方のポイントは二つあると思います。一つは環境との接点を感覚器官が受容する刺激におく発想です。刺激というのは生理学的、物理学的に記述できるエネルギーであるわけですが、それ自体ではそこから出発して成立する知覚の意味、知覚的な世界の価値を説明できない。(中略)もう一つは、意味というのはそういう刺激と因果的に連鎖している精神という実体の創作であるという点です。意味は精神が刺激を処理した結果生じてくるものだという考え方です²⁾。(佐々木・村田, 1994: pp. 263-264)

「知覚とは、環境からやってくるデータにたいして、心が何らかの処理をくわえる過程である。よって、わたしたちは環境を直接に知覚することはない」という考え(これをギブソンは「間接知覚論」とよぶ)は近代以降の知覚論・認識論の主流をなしていた。(河野, 2003: p. 5)

「間接知覚論」とは、ごくかいつまんで言えば、デカルトの物心二元論を主要な前提として、物理世界（環境）と心理世界（現象）との間に何らかの変換過程を指定する認識論的立場と要約できる。伝統的な感覚/知覚/認知やボトムアップ/トップダウン処理の水準区分の考え方はその代表と言えるし、ヘルムホルツの無意識的推論・ゲシュタルト心理学の図一地分化・ブロードベントの情報処理心理学など、考えられる例は枚挙に暇がなく、前節で挙げた「分化」「理解」もこの中に含めることができる（たとえば、図一地分化等は前者に対応し、トップダウン処理等は後者に対応する）。ギブソンがあえて「間接知覚論」と名づけて相対化を図ったのも、その思想がもはやグランドデザインとしてあまりにも普遍化され過ぎていたがためと考えられる。

本論では、この「間接知覚論」がわれわれの日常においても暗黙の知覚観（メタ認知）となっている可能性を、先の因子分析から得られた因子4（理解不可能）・因子5（知覚的未分化）に関する考察を通して検討する。前節でも触れたとおり、因子4は「理解」された世界、因子5は「分化」された世界としての「現実」観を反映した「異界」イメージだと言える。たとえば、マジックを見てわれわれが驚くのは、眼前の事実をただありのままに、ではなく、物理法則等の何らかの論理を前提に理解（意味づけ）・予測をしながら知覚しているためだし、明け方・夕方 が伝統的に「異界」と関連深く考えられてきたのは、「かはたれ（彼は誰）」「たそがれ（誰ぞ彼）」の別称が示すとおり、相手の顔が判別できない時間帯であるため（小松，1991），と考えられる³⁾。

このように個人が「間接知覚論」を暗黙の知覚観として有するならば、世界はその人にとって主観的なものとして強く認識されているであろう。これに関連する指標としては、ユングの向性（外向型/内向型）得点やロールシャッハ・テストの体験型（色彩型/運動型）等が挙げられるが、① 両者の類型区分はほぼ類似のもの

と考えられる（河合，1986）② 向性検査はロールシャッハ・テストより実施・採点が簡便である点を考慮して、前者の指標を採用することとした。「主観的な認識スタイルを有する内向型の被験者は、その認識スタイルが適用されない、すなわち『未分化』かつ/もしくは『理解不可能』な世界として『異界』をイメージする傾向が強い」との仮説を本論では検証する。もちろん厳密には、主観的な認識スタイルを有すること（認知）と世界を主観的に認識されたものとして認識すること（メタ認知）は区別されねばならないが、ここでは、前者の特徴を有する内向型の被験者が後者のメタ認知をも強く有すると仮定して論を進めることとし、この点に関する更なる論究は今後の課題としたい。

本調査の被験者に淡路式の向性検査を実施し、向性得点上位者23（男性7・女性16）名、下位者22（男性3・女性19）名をそれぞれ外向型・内向型とした。得点のレンジは、外向型が130～158点、内向型が54～90点である。因子4・5について因子得点上位1～4位の「異界」（因子4：宇宙・ブラックホール・天国・異次元、因子5：無・闇・ブラックホール・死後の世界）をピックアップし、それぞれにおける被験者の因子得点を従属変数として2要因（向性×異界）の分散分析を行ったところ、検討されたどの異界についても内向型の因子得点が高く、仮説と明瞭に合致する結果が得られたが、向性の主効果は統計的には有意ではなかった。ここで検討された異界は因子得点が上位1～4位と非常に高く、いわばあまりにも典型的な例であったために、被験者の向性にかかわらず一律のイメージが生じやすかった（たとえば、誰が考えても「無」「闇」には対象を知覚的に特定する輪郭線が存在しない（未分化）し、「宇宙」はミステリアス（理解不能）である）とも考えられる。そこで今度は、因子得点が5～8位の異界（因子4：死後の世界・ファンタジー・霊界・パラレルワールド、因子5：霊界・異次元・宇宙・魔界）をピックアップし、同様の2要因分散分析を実施したところ、

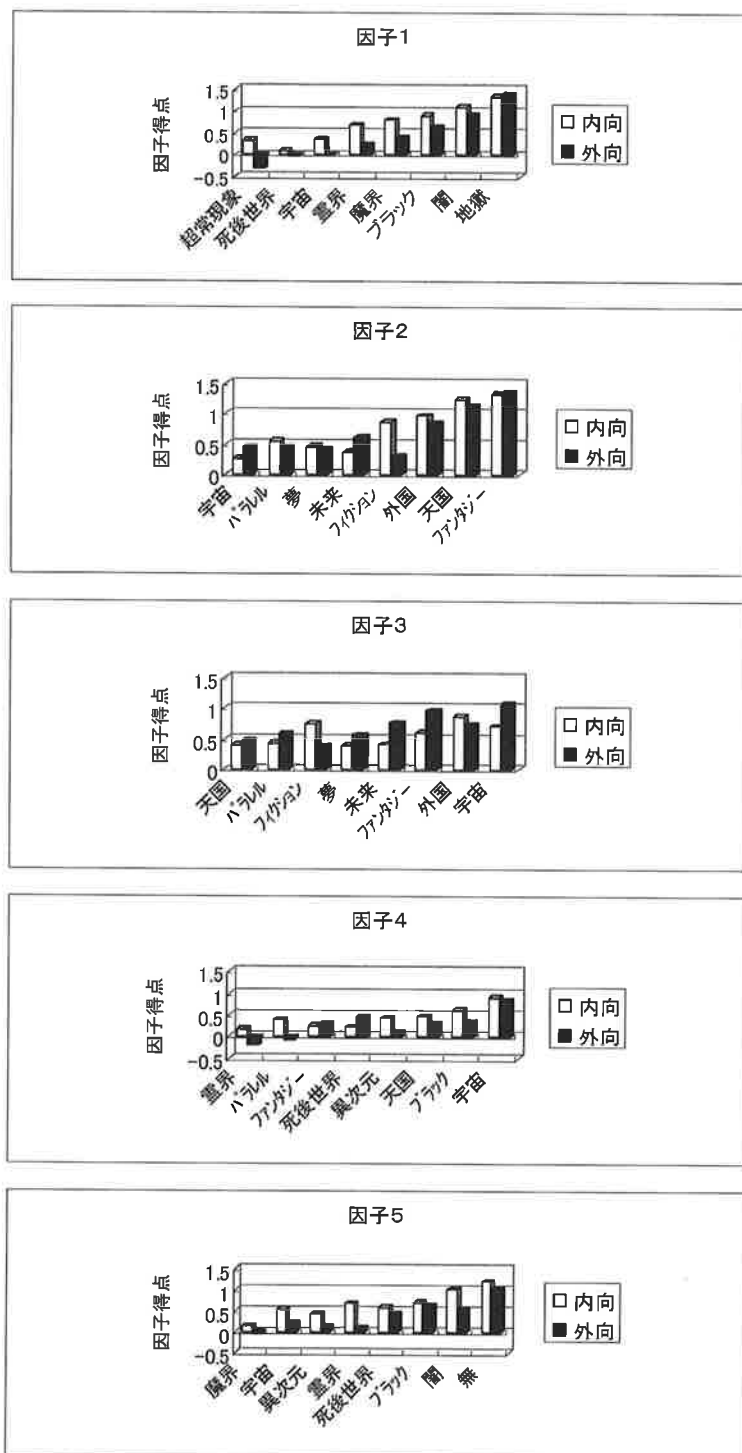


図3 因子得点上位の「異界」における内向型・外向型の因子得点

因子4では「パラレルワールド」(*)、因子5では全ての異界(+)について内向型の因子得点が外向型より有意に高い結果が得られた(+)は10%水準、*は5%水準、**は1%水準の統計的有意性を示す。以下同様)。また、ノンパラメトリック検定(Wilcoxonの符号つき順位検定)により因子得点上位1~8位の異界について検討すると、因子4(+)-因子5(*)でそれぞれ内向型の因子得点が有意に高い結果が得られた。したがって上述の仮説に対して一定の支持の見解が得られた、と考えられる。

ただし、異界について内向型の被験者に何らかの一般的傾向(たとえば異界をイメージする能力が高い等)が存在している可能性も考えられるので、因子1~3についても同じ手続きで統計的検定を実施した。分散分析の結果、因子1の「宇宙」「死後の世界」「超常現象」「霊界」(すべて*)、因子2・3の「フィクション」(前者は**、後者は+)で内向>外向、因子3の「ファンタジー」(+)-「宇宙」(+)-「未来」(*)では内向<外向の形で因子得点に有意差が見出された。また、ノンパラメトリック検定では因子1(*)においてのみ内向>外向の結果が得られた。因子得点上位(1~8位)の「異界」における内向型・外向型の因子得点を、各因子ごとに図3に示すので参照されたい。これらの結果は、因子4・5の得点に見られた内向>外向の関係は、全ての因子について普遍的に成立するのではなく、したがって、内向型の被験者が「異界」に関する上記のような一般的傾向を持つことによるものではないことを示している。しかし、内向>外向の関係が他の因子(特に因子1)についても見られることについては問題が残る。因子4・5での内向>外向の関係が、本論の仮説通り内向型の被験者の暗黙の知覚観を反映しているとして、因子1にも同様の解釈を適用すべきであろうか?逆に、暗黙の知覚観とは別の内向的特性を想定し、因子1にのみその反映を考えるべきだろうか(たとえば、内向型の被験者は不安や悲観性が強い「非情」のイメージが喚

起されやすい可能性がある)?それとも、その特性が因子1・4・5すべてに反映されている、とまで考えるべきだろうか?この点については、今後の検討課題としたい。

4. 総 括

本論の内容を以下に要約する。

(1)「異界」のイメージに関する因子分析により、5つの因子—非情、快適さ、魅力、理解不可能、知覚的未分化—が抽出された。

(2)内向型の被験者は、「異界」を「理解不可能」「知覚的未分化」とイメージする傾向が外向型以上に強いことが明らかになった。彼らの暗黙の知覚観—間接知覚論—を反映するものと考えられるが、詳細については今後の検討を要する。

注

- 1) 代表的な刊行物として、宮脇俊三の編集による「鉄道廃線跡を歩くI~X」(1995~2003)や小林真一郎の写真集「廃墟遊戯」(1998)「廃墟漂流」(2001)「廃墟をゆく」(2002)のシリーズを挙げることができる。
- 2) ここでの「意味」は、本論でいう「理解(意味づけ)」のみならず「分化」の所産までを指示すると考えてよいであろう。丸山(1984)の記述を引用しておく。

端的に、<意味=現象>以外の事象は認知されず、分節肢としては存在しないと言ってよいだろう。もちろん、ここでいう意味とは、単に言語的なもの(語彙の意味と機能的意味)を指しているのではない。私たちは、現に名も知らぬ事物を認知し、意味も知らぬ物音に反応する。<意味=現象>というタームで表される意味とは、人間という動物の<生への関与と生>のことであり、狭義の意味を持たぬ現象でもそれが私たちに認知されるのは、その現象が私たちの<生への関与と生>をもつ限りにおいてであるという指摘にほかならない。(中略)言語としての意味をもたぬ雑音も、(中略)人間にとって立派な<意味=現象>であるために聞こえていることを忘れてはなるまい。このように<意味=現象>は、時に<意味=音>であり、<意

味=形>であり、<意味=色>であり、<意味=味>、<意味=臭>、<意味=感覚>等々という形をとって現出する。(丸山, 1984: pp. 65-66)

- 3) 一般的な間接知覚論では、「分化」が「理解」に先行する、と考えられる。

引用文献

- Gibson, J.J. 1979 The Ecological Approach to Visual Perception. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum. 邦訳 生態学的視覚論 1985 古崎敬他共訳 サイエンス社
- 岩宮恵子 1996 <異界>といじめ こころの科学 70 31-35. 日本評論社
- 門脇厚司 1992 子供と若者の<異界> 東洋館出版社
- 門脇厚司・宮台真司(編) 1995 「異界」を生きる少年少女 東洋館出版社
- 河合隼雄 1986 ユングのタイプ論に関する研究 心理療法論考 317-340. 新曜社(初出 1982 京都大学教育学部紀要 28)
- 小林真一郎 1998 廃墟遊戯 メディアファクトリー
- 小林真一郎 2001 廃墟漂流 マガジンハウス
- 小林真一郎 2002 廃墟をゆく 二見書房
- 小松和彦 1991 神隠し—異界かいらのいざない 弘文堂
- 河野哲也 2003 エコロジカルな心の哲学—ギブソンの実在論から 勁草書房
- 丸山圭三郎 1984 文化のフェティシズム 勁草書房
- 松村明(編) 1995 大辞林第二版 三省堂
- 宮脇俊三 1995-2003 鉄道廃線跡を歩く I~X JTB キャンプックス
- 内藤正敏 1998 日本「異界」発見 JTB
- 日本大辞典刊行会(編) 日本国語大辞典 小学館
- 境敦史・曾我重司・小松英海 2002 ギブソン心理学の核心 勁草書房
- 佐々木正人 1994 アフォーダンス: 新しい認知の理論 岩波書店
- 佐々木正人・村田純一 1994 アフォーダンスとは何か(対談) 現代思想 vol. 22-13. 262-293. 青土社
- 新村出(編) 1998 広辞苑第五版 岩波書店
- 田中康裕 1995 心理療法過程における「内なる異界との交通」—極度の対人緊張を訴えて来談した青年期男子の一事例から 心理臨床学研究 13-1 85-96.